
” 運命 ” って信じる？

膳条 司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

”運命”って信じる？

【Nコード】

N6525B

【作者名】

臙条 司

【あらすじ】

キミの隣を歩く女の子が、ある決意の元に切り出した言葉。それを、キミもまた、ある決意をもって彼女に答える。

（前書き）

またまた実験的に書いてみた作品です。内容はすごく薄いです。
（そんなものを投稿するな、って感じですが）

”二人称”という、特殊な視点を用以てみたのですが……　これ
って本当に二人称かな……？

「ねえ、“運命”って信じる？」

女の子が、隣を歩くキミにそう尋ねた。

ちなみに“僕”は信じていないけれど？

「“運命”かあ……」

問われたキミは、うーんと唸^{うな}って考え込む。腕を組んで頭を捻^{ひね}る

その仕草は、どこか子供っぽくて可愛らしい。

そう言つと、キミは怒るんだけどね。軽くコンプレックスでも持
っているのかな？

「私はね、信じてるんだ」

キミの答えを待ちきれなかったのか、彼女が先に答えを言った。

仰ぐように空を見て、温かくなり始めた春風に髪を靡^{なび}かせる。

「だって、ロマンチックだと思わない？ 自分にとつて、世界で唯

一人決められた人がいて、どんな偶然か、その人と巡り合える……

そんな奇跡が起る、って考えると……」

言いながら、彼女はちらりと横目でキミを見た。

そういえば言い忘れていたけれど、実は彼女はキミのことが好き
なんだ。今までずっと隠してきたけどね。

周りの友達は、どんどん恋人を作つて、幸せそうに語る。

それを羨ましいと思いつつも、それでも告白して、断られて、そ
れで距離が開いてしまうくらいなら、ずっと“友達”のままでいい。
そう考えてきた。

けれど、そんな“見つめるだけ”の恋に、彼女はとうとう満足で
きなくなってしまったのさ。

だから、勇気を出して告白しよう。そう考え、どう切り出すかを
決めたのは、昨夜のこと。

「“運命かあ”……」

キミはさつきと同じように呟いて、

「俺は信じないかな」

と続けた。

「えっ!？」

彼女は少し驚いて、そして少し悲しくなった。

本当ならこの流れのまま、「私の運命の人が、君であって欲しいな」と続けていくつもりだったのに、その機先を制されてしまったからだ。

キミは、そんな彼女を横目でちらりと見る。

そういえば忘れかけていたけれど、実はキミは彼女のことが好きなんだったね。今までずっと隠していたみたいだけど。

入学したばかりの頃、他人に声をかけることもできなかったキミに声をかけた最初の人、それが彼女だった。

その後、すぐの席替えで、隣の席になった。思わず“運命”を感じてしまう一瞬だ。

それからは青春の日々さ。教科書を忘れた時は、ドキドキしながら机をくつつけて、震える手で必死にノートを取っていたって聞いたよ。

それだけで幸せだったはずなのに、そんな“見つめるだけ”の恋に、キミはとうとう満足できなくなってしまうたんだね。

だから、勇気を出して告白しよう。そう考え、どう切り出すかを決めたのは、ついさつき。

「だって——」

わずかに俯いた彼女を励ますかのように、キミは言葉を次ぐ。

「“運命”ってさ、“物理学”から生まれた言葉だっていうんだぜ?」

「それって、どういうこと?」

キミの口から出た思わぬ言葉に、彼女がきよとなった。
その顔を見て、キミは思わず胸が高鳴る。

興味なさげに欠伸を一つ。本当は、緊張していた所為なのと、深呼吸の意味を兼ねてのことだったんだろう？ 憎たらしいね、この空を見たのも、努めて平静を装ったのこと、違うか？

「物理には色んな公式があるだろ？ それこそ、ありとあらゆる“自然現象”を説明できるくらいにさ」

あゝ、無視すんナヨ……って、そりゃ無理か。

「うん。覚えるの大変だった」

彼女が楽しそうに笑う。

キミも楽しそうに笑う。

「だよな。その公式の中にはさ、色んな……パラメータ？ ってあるじゃん。速度とか質量とか時間とか」

「うん。F = ma とかね。でも、それがどうして？」

「時間を考慮できるってことは、過去や未来のことも考えられるってことだろ？」

「？」

彼女はまた、きよとなる。理解が難しいらしい。

それを感じ取って、キミは説明をする。ちなみにこの観察眼は、彼女に少しでも気に入られるようにと、この一年で身に付けた努力の成果。さらに余談だけど、ファッションの勉強もしていた。こっちの成果は今一つみたいだね。

「今、俺達は時速5km で歩いてるとすると、十分後には？」

「ええっと……ろ、六分の5km……」

「あはは。そうだね、六分の五で……まあ1kmくらい。つまり十分後には、駅前あたりにいるってことだ。ほら、未来の俺達がどこにいるか、わかつちやったる？ 計算できるってことはすなわち、俺らの未来は、あらかじめ決められているってことになるんだよ」

「そんなの、わからないよ。もしかしたらどこかに寄り道するかもしれないし、駅の方に向かわないかもしれない」

彼女が当然の反論を返す。

しかしキミも、当然のように返す。

「うん、そうだね」

でも、それは別の話。その可能性だって、別の計算式を用いれば、計算が可能なんだ。それが物理学における“運命”という理論。

だから――

「だから運命なんて信じない」

あらら、先に言われちゃった。

「だれかが決めたレールの上を歩いてる、なんて、全然ロマンチックじゃないだろ？ それだったら、俺は『運命とは自分の手で切り拓くもんだ』って言う方が、ずっとロマンチックだと思うんだ」

言うときミは、彼女に向き直った。そして、自分を、彼女を安心させるように、一つ微笑む。

彼女もまたその笑顔を受けて、少しだけ頬を赤らめる。そして決意したように、一つ微笑む。

――『自分の運命は自分の手で切り拓く』

「「あの……！」」

それから、二人がどうなったか知りたいかい？　これがね、傑作だったんだ！

実はね…… やめた。

これを読んだ“あなた”がもし、運命を信じる人ならば、彼らの行く末を占ってみてよ。

これを読んだ“あなた”がもし、そうじゃない人ならば、その時

は“僕”に聞きに来て。

お茶でも飲みながら、彼らの“未来”について、ゆっくり語って
みようじゃないか……。

（後書き）

いかがでしたでしょうか？

書いた本人、よくわかりません。ごめんなさい。

読み返してみて、なんだか変な心地になっっているんですが……

不快に思われた方がいらっしやいましたら、深くお詫びいたします。本当に申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6525b/>

”運命”って信じる？

2010年10月8日15時12分発行